

KIRIKEN LIBRARY

『大学の神学—明日の大学をめざして—』（古屋安雄著、ヨルダン社、1993年）

大西 晴樹

青年人口の減少と設置審の大綱化をうけて、今日ほど大学改革が議論される時代はないであろう。本学においても、学長のクリスチャン・コード問題、教学改革の問題を抱え、新しい時代にふさわし

い大学造りに生みの苦しみが続いている。ICUの教授・チャプレンである著者による本書は、「明日の大学をめざして」という副題をもち、その出口を模索する点で、同じキリスト教大学に勤務するものとして心よりその出版を喜ぶたい。

本書は、三つの主要な部分からなる。第一に、著者の母校であり、本学にとっては学祖のひとりヘボン博士の母校であるプリンストン大学の学校史。第二に、アラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』に触発されて、現代の学問における危機的状況を指摘した部分。第三に、著者の主張である「大学の神学」に言及した部分である。他に、最初の章において現代の大学の危機を一般的に論じ、最終章で、アジアのキリスト教大学との連携の強化を訴えているが、これらは、あくまでも、本論にとって補佐的な役割を果たすにすぎない。

第一のプリンストン大学史であるが、もっとも読み応えのある箇所であった。アメリカの「大学らしい大学」であるプリンストンを、著者は、母校愛に掻きたてられながら見事な筆致で描きだしている。歴代学長の息遣いすら伝わってくるといっても過言ではない。それとは対照的に論理的に無理があると思われたのが、ブルームに触発された第二の議論である。著者はブルームに乗じる形で、アメリカの大学に浸透した「ドイツのイデオロギー」（ウェーバー、ハイデッカー）をナチズムを助長した歴

史的相対主義、価値的相対主義として断罪し、他方で、ナチズムに抵抗したティリッヒ、バルトの神学を称揚する。そのうえ、高坂正顕まで持ち出してきて、「哲学」はもはや行き詰まっており、大学の「神学」の必要性を訴えるのである。しかし、ドイツのイデオロギーだけが、ブルームのいう「学問の危機」の元凶なのであるだろうか。むしろ英米の伝統にある功利主義、快楽原則主義はどうなのか。日本における天皇制への対峙を考えるなら、獄死した三木清や河上肇の「哲学」を称揚することはできても、アジア侵略に手をかけた当時のキリスト教学校の指導者の「神学」を批判的に吟味することなしに、このような結論を下すわけにはいかないのである。

第三の議論はトレルチの神学による「文化総合」に示唆を受けながら、著者みずから大学批判と同時に大学形成としての「大学の神学」を展開している。筆者には、学問批判としての神学の役割は理解できても、創造、和解、救贖の三位一体論を自然、人文、社会科学に当てはめることには納得がいかなかった。キリスト教大学においては、真理探求の基にイエス・キリストが据えられることが肝心なのであって、神学が各学問領域を包摂することはできないように思われるからである。

（おおにし はるき

所員、経済学部教授）